宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要　第19号，203－215，2011

“弁当の日”の特質と実践課題

原　陽子*　　竹内　元**

The essence and practical perspective for “Bentonohi” in school

Yoko HARA*　　Gen TAKEUCHI**

Ⅰ．はじめに

“弁当の日”は2001年から香川県の滝宮小学校で始まった。この活動は約10年の間に，全国の小中学校に広まり，今では43都道府県の500を超える学校で実施されているという。[1] なかでも，宮崎県は，近々，実施校が130校を超えると予測されている。性急なひろがりは，いきなり全学年で実施したり，インスタント食品等を入れてはいけないと禁止したり，あるいは，お互いの弁当を見せ合うコンテストや参観日に掲示したお弁当写真が食材競争をあおったりすることもある。

本研究の目的は，“弁当の日”における教育実践の特質と実践課題を明らかにすることである。本研究では，まず，“弁当の日”という教育実践の特質を明らかにすることで，“弁当の日”が育みうる子ども像はどのようなものかを検討する。次に，“弁当の日”の実践構造を明らかにすることによって，教育実践としての“弁当の日”のあり方を検討する。最後に，“弁当の日”の特質と実践構造をふまえて，教師が取り組む実践課題を提示する。

Ⅱ．“弁当の日”の特質

1．“弁当の日”の方法 ― 子どもがつくり，保護者は手伝わない

“弁当の日”は，竹下和男が提唱した食育実践である。竹下和男は，４月のＰＴＡ総会において「くれぐれも子どもの弁当づくりを手伝わないようにしてください」と，保護者に提案した。[2]「いっさい手伝わない」と保護者に伝える点が，提案のポイントである。滝宮小学校でスタートした“弁当の日”の方法は，＜表１＞の通りであり，[3] 国分寺中学校で提案された“弁当の日”の原則は，＜表２＞の通りである。[4]

* 宮崎大学大学院教育学研究科院生　　** 宮崎大学大学院教育学研究科

＜表１＞

滝宮小学校（平成13年度）
1. 弁当をつくるのは，子ども。保護者は手伝わない。
2.「弁当の日」の対象は，5・6年のみ。
3. 献立，食材の購入，調理，盛りつけのすべてを子どもたちの手で。
4. 実施するのは，10月以降の第3金曜日で月1回，年5回。

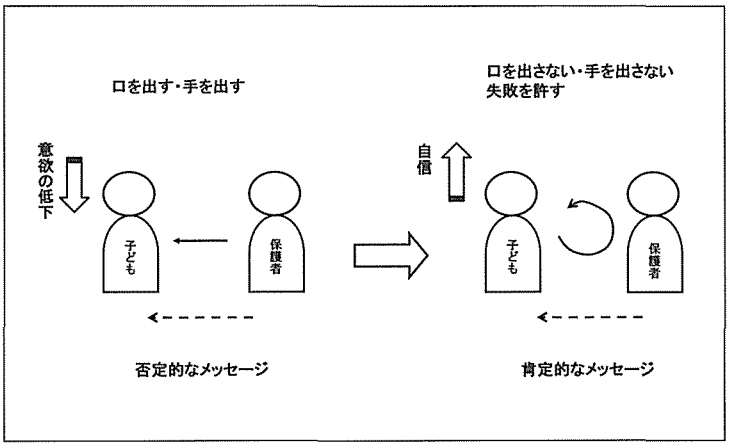
＜表２＞

国文寺中学校（平成16年度）
1. 生徒だけで作る・・・・・・献立，買出し，調理，弁当箱詰め，片付けを生徒だけでする。親は手伝わないこと。教えてもらうのはいいが，作ってもらうのはダメ。
2. 年三回・・・・・・12月13日，1月17日，2月14日の月曜日
3. 挑戦するクラスのみ実施，実施クラスは給食費を払い戻す。

“弁当の日”は，子どもが弁当をつくる。そのさい，巻き寿司を巻くところだけを，コロッケを揚げるところだけを，あるいは，弁当箱に盛り付けるところだけを，子どもが何度しても，弁当をつくることができるようになったとは言えない。“弁当の日”は，子どもたちが自分で計画し，材料をそろえ，すべての手順を自分で行い，自分で食べる。“弁当の日”は，子どもたちの自立を促す機会である。竹下和男が「子どもだけでつくる」というルールに，「保護者は手伝わないでください」というフレーズを加えるのは，保護者に負担をかけたくないからだけでなく，子どもが自立するためには，保護者は手伝わないほうがいいからである。[5]

保護者が子どもの弁当づくりを手伝わない。子どもの弁当づくりに手を出さない。しかしながら，保護者が子どもの弁当づくりを手伝わないことは，子どもを放任し，ほったらかしにすることではない。むしろ，保護者は，子どもに手間ひまをかけることになる。子どもたちの弁当づくりには，手順のまずさ，調理の危なっかしさ，食材などの無駄の多さ，あと片づけの大変さが表れるからである。ハンバーグがやわらかすぎたり，ほうれん草をゆですぎたり，野菜いためがこげたり，おにぎりの形がくずれたりする。いためればやわらかくなると思って，カレーをいつまでもいためていたり，カラアゲを揚げるときに，油が飛び散ることもある。テーブル用の小さな醤油さしに，一升ビンから醤油を補充するときに，一升ビンを傾けすぎて，溢れさせてしまう失敗もある。[7]「口を出さない，手を出さないという約束のもと，辛抱すること，見守ることの大切さに改めて気づかされたように思います。『もう時間がない，早く』『あっ，そうじゃなくて・・・・・・』という言葉をいくつ飲み込んだのだろう。そんななかで，回を重ねるごとに少しずつ要領よく，手際よく料理していく子どもの後ろ姿はひとまわり大きく感じられた」[8] と保護者が言うように，子どもを見守る保護者が，子どものペースを保障し，子どもの試行錯誤を奪わないことが求められるのである。“弁当の日”に，保護者は子どもに何もしていないわけではない。子どもが求めていないのに，弁当づくりに口を出したり手を出したりしてしまっていないかどうか。そうした保護者の行為が，子どもたちに「自分は上手くできない」といった否定的なメッセージを与えている点に，保護者自身が気づけるかどうか。また，子どもが弁当をつくるということは，保護者が子どもの失敗を許すことである。どんなに失敗しても，保護者に見捨てられないと子どもに感じさせているかどうか。そうした保護者の行為が，子どもたちに「失敗してもいい，成長を信じている」といった肯定的なメッセージを与えている点に，保護者が気づけるかどうかが重要となる。“弁当の日”は，子どもがつくるという形式だけを真似するものではない。[9]“弁当の日”という方法が求めている保護者と子どもの関

係に，注意が必要である。（図１参照）



＜図１＞

２．“弁当の日”で育む自立 ― 孤立ではない

子どもたちが弁当づくりを通して学ぶのは，単なる調理の技能や段取りだけではない。一つには，仲間と一緒につくることを愉しみ，誰かのために心をこめて調理することを通して，ふだん食事を作ってくれている人の存在のありがたさに気づく。

「私はふっと給食の『炊き込みご飯』をイメージした。ひじき。そうだ。私はひじきご飯に挑戦することに決めた。しかし，家に帰ってお母さんにひじきご飯はどう作るのか聞くと，実はお母さんもひじきご飯は作ったことがなかった。頭に大きな穴がポカンとあいたような気分におそわれながら，私は一生けん命考えた。ゆでるのかな，あげるのかな，むすのかな，たくのかな，いためるのかな。そうだ。いためればいいんだ。

フライパンをあたためて，油を引いて生のひじきを入れ，いためた。しょうゆとさとうを入れてみた。これでいいのかと不安を感じながらではあるが，色は同じ，見た目は同じである。それをあたたかいごはんにまぜた。そう，見た目は給食のひじきご飯にそっくりだ。よし，楽しみだ。わくわくしながらお弁当の時間を待った。

お昼だ。さあ食べるぞ。食べたらめちゃまずかった。しかし，友だちにはそんな顔は見せられない。心で泣いて，顔で笑って食べた。まわりの友だちはおいしそうに食べている。私は最後まで食べた。だってどんなにまずくっても自分で作ったんだし，材料がもったいない。

このような失敗をくり返しながら，成功したときの喜びはたまらない。そして，お母さんの苦労が身にしみた。挑戦することの大切さも学んだ。」[10]

「子どもだけがつくる」というルールは，誰に頼らなくても一人で生きていけること，つまり孤立を子どもたちが学ぶためにあるのではない。子どもたちは，様々な失敗や苦労を経験することや誰かのために弁当をつくることで，これまで保護者がどれだけ自分のために時間をつくってくれたか，どれだけ自分のことを考えてくれたかということに気づくようである。竹下和男は，料理をつくるために費やした時間は，寿命の一部だと指摘する。料理をつくる人は，食べてほしい人のために，あるいは，自分のために寿命を費やしている。料理は，食べてもらう人のために時間を和える行為である。「いただきます」は，食材となった動植物のいのちを

いただいているだけでなく，料理をつくる人が費やしたいのちをいただいているのである。[11]

二つには，子どもたちは，献立から片付けまでを一人でできるようになると，「自分一人では弁当をつくっていることにはならない」ことに気づくようである。米や野菜を作る人，牛や豚を育てる人，それらの食材を運ぶ人，売る人，フライパンや包丁を作った人，ガスや電気を家庭に送ってくれる人など，自分が見ていないところで，たくさんの人が働いているなかで自分の弁当づくりができる。子どもたちは社会のなかで生きていることを実感する。自分の弁当を自分でつくることは個人的な行為であるが，弁当づくりは社会のありようと密接につながっているのである。[12]

子どもたちは，弁当づくりを通して，保護者も含めてたくさんの人のおかげでいまの自分があることに気づく。この他者とのかかわり・つながりへの気づきが，竹下和男が「自立」と呼ぶものである。どれだけ多くの人に支えられてきたかを子どもたちが認識できるかどうか。“弁当の日”を通して子どもたちの他者感覚が育まれているかどうかが重要となる。

3．家庭との協働で成立する“弁当の日”－「心の空腹感」を埋めるために

“弁当の日”は，保護者がつくるのではなく，子どもが自分で弁当をつくる。“弁当の日”の３回目に，くろこげの焼肉弁当をつくってきた子どもがいる。[13] 朝寝ぼうして生にんじんときゅうりまるまる１本を入れてきた子どもがいる。サラダをつくろうとして，自分で買い物をし，レタスを買ったつもりが，弁当をつくった後に，「あんたそれキャベツやで」と親に突っ込まれた子どもがいる。弁当の日は，子どもの失敗が許される日だ。子どもの失敗は，自立への挑戦だからである。子どもがつくる弁当は，完成度ではなく，自立度が重要となる。[14]

ところが，保護者はこれまで子どもに包丁を使わせてこなかったし，ガスコンロの使い方を教えてこなかった。だから，“弁当の日”を始めると，どうしても保護者がつくった弁当を持たせてしまうことがある。保護者が子どもの失敗を許している弁当には，保護者自身が自らの見栄や世間体に打ち勝った，人間としての包容力が背景にある。子どもの可能性を見つめている保護者の姿がある。

しかしながら，「心の空腹感」を抱えている子どももいる。「心の空腹感」とは，「私は手間をかけて育てる価値がない存在なのか」という子どもからの問いである。[15] ある子どもは，遠足のときに持っていく弁当を母親が作らなくなって，とても豪華な弁当を持たせてもらっていた。次の秋の遠足のときに，また豪華な弁当を買って子どもに持たせようとしたら，「おにぎりだけでいいからお母さんがつくって。いっぱいご馳走があっても何にもうれしくない。おかずなんにもいらない。おにぎりだけでいいからお母さんがつくって」と言ったという。また，誰かに食べてもらいたい弁当を作らせたときに，100％冷凍食品の弁当を持ってきた中学三年生の女の子がいた。「私は中学三年生になるまで，親の手料理を食べたことが一度もない，だから仕返し弁当だ」という。子どもは料理という手間ひまに親の「顔」を見ている。自分へのまなざしを感じている。[16]

あるいは，子どもたちは，台所で忙しそうにしている親を見ると，「なにか手伝えることはないの？」と言ってくることがある。でも，つい「じゃまになるから，あっち行って」と言ったり，「今はダメ。それより宿題していて，そのほうが助かる。それがあなたの仕事なんだから。」と断ってしまう。また，子どもに手伝わせても「こぼした」「汚した」と叱ってばかりになる。問題は，子どもたちが，自分は親を助けられない子どもだ，親の役に立たない子どもだ，

手伝わないほうが親はうれしいのだと思ってしまうという点である。「じゃまになるから」「今はダメ」という言葉は，子どもの存在価値そのものを否定してしまうのである。[17]

“弁当の日”は，子どもたちの日常生活のなかにあなたの存在を肯定的にみる家族がいることを気づかせようとする試みである。そのさい，保護者との協働があって“弁当の日”は成立する点に，注意が必要である。「心の空腹感」が子どもたちに生じていることを保護者のせいにしてはならない。家庭に還元される問題ではない。保護者に責任を押しつけてはならないのである。学校教育と家庭教育の責任分担を明確に分けるのではなく，学校教育と家庭教育の重なりのなかで“弁当の日”は構想されているという点が重要となる。[18]

Ⅱ．“弁当の日”の実践構造

1．“弁当の日”の回数と課題設定 ―“弁当の日”は行事ではない

滝宮小学校の“弁当の日”の決まりは，子どもだけでつくること，5・6年生のみ，10月から2月まで月1回の計5回という三点である。国分寺中学校の“弁当の日”の決まりは，生徒だけでつくること，3年間で7回，毎回の課題設定である。ここでは，回数と課題設定について整理してみよう。

滝宮小学校では，2年間で11回の“弁当の日”を行っていた。“弁当の日”のスタートは，5年生の10月である。2001年度の実践では，「栄養のバランス弁当」という課題が第一回目に設定されている。6年生は，5月はじめに若草給食と呼ばれる野外給食からはじまる。若草給食は，全校生が給食を弁当箱につめ，運動場，木陰，遊具のまわりで食べるものである。[19] 6・7月は，食中毒の心配から実施されていない。6年生最後の“弁当の日”は，「冷蔵庫整理弁当」という課題が出されている。[20] また，献立作りの際，栄養士から「必ずひとつは旬の食材を使うこと」という点が子どもたちに伝えられている。[21] 2004年7月の実践報告では，10月から月1回，2年間で10回行われている。10月は，5・6年生とも青空弁当である。5年生の1月に野菜と卵弁当，2月におにぎり弁当，6年生の2月にバイキング弁当という課題が設定されている。[22]（表3参照）

＜表3＞

	2001年度（平成13年度）	2004年7月報告	2005年2月報告
6年	2月　第11回　冷蔵庫整理弁当	2月　第5回　バイキング弁当	第4回
	1月　第10回	1月　第4回	第3回
	12月　第9回	12月　第3回	
	11月　第8回	11月　第2回	第2回
	10月　第7回	10月　第1回　青空弁当	第1回　青空弁当
	5月　第6回　若草給食		
5年	2月　第5回	2月　第5回　おにぎり弁当	第3回
	1月　第4回	1月　第4回　野菜と卵弁当	第2回
	12月　第3回	12月　第3回	
	11月　第2回	11月　第2回	第1回
	10月　第1回　栄養のバランス弁当	10月　第1回　青空弁当	

国分寺中学校では，3年間で7回行われる。1年生の前半は指導期間のため，3年生の後半は高校入試のため，実施されていない。[23] 中学生は，毎回課題が設定されている。（表4参照）[24] 2006年度の実施計画は，次の通りである。（表5参照）[25] 自己管理能力を高めるために設

＜表４＞

中学生のための7つの課題

①今が旬弁当
②こだわり弁当
③安全・安心弁当
④地産地消弁当
⑤和食弁当
⑥郷土料理弁当
⑦誰かに食べてもらいたい弁当

＜表５＞

		テーマ	指導内容
3年生	5月	郷土食 （郷土料理が入った弁当）	郷土料理とその作り方
	10月	もてなす （OOに食べてもらいたい弁当）	食事のマナー／感謝の気持ち
	未定	なべの日 （なべ奉行になろう）	先生への親睦会／家族にふるまう
2年生	5月	健康管理（安全・安心弁当）	切る／焼く／衛生管理と食中毒
	10月	地産地消 （地元の食材を使った弁当）	ゆでる／いためる／炊く／香川県産の食材を使う
	1月	日本食（和食弁当）	魚を使った料理／だしの取り方
1年生	10月	四季の季節感（今が旬弁当）	献立の立て方／弁当作りの条件／生鮮食品と旬
	1月	わが家の自慢（こだわり弁当）	わが家の自慢料理調べ

自分で作る"弁当の日"実施計画（2006年度香川県の国分寺中学校）

定された「安全・安心弁当」，家族の絆を深める機会として設定された「こだわり弁当」，「誰かに食べてもらいたい弁当」のほかは，和食になじんでほしいというねらいがある。番外編として，なべの日があり，鍋奉行養成講座が授業に組まれている。

両者に共通しているのは，月１回という間隔である。月１回であるのは，ひと月間隔のくり返しが技量の大きな向上をもたらすとともに，くり返しが「つい手伝ってしまう親」「つい手伝ってもらう子ども」の意識改革を実現すると考えられているからである。[26] “弁当の日”は，年に１回のイベントではない。くり返し行われることが必要である。くり返しの間隔が，子どもたちの挑戦する機会になっているかどうかがポイントとなる。[27]

２．学習カードと教師のまなざし

滝宮小学校では，子どもたちが弁当のメニューを事前に考えるための手だてになるよう，学習カード「お弁当作りにチャレンジ」がつくられている。学習カードには，弁当の名前やおすすめポイント，できあがりのイメージ図，材料と分量，つくる手順が書かれ，自分がつくる弁当の材料に含まれる栄養素を調べるものである。子どもたちは，自分でつくる弁当に自分で名前をつける。工夫したこと，自慢したいこと，楽しんだことなどが，弁当の名前から伝わってくる。名前をつけることは，弁当づくりにこだわりが生まれるしくみでもあろう。教師は，子どもたちが書いた学習カードに目を通す。（表６参照）献立にアドバイスをするだけでなく，励ましの声かけを行っている。[28] さらに，学習カードには，弁当を食べた後に，自己採点をし，家の人や自分の感想，友だちからの一言が記入される。

＜表６＞

「弁当の日」当日までの流れ

①学習カードに作りたい弁当のテーマやイメージ図，手順などを記入する。

②教師や栄養士にアドバイスをもらって，学習カードを修正する。

③学習カードを家に持ち帰り，買い物の打ち合わせをしたり，手順についてアドバイスをもらったりする。

④前日，買い物や下準備をする。

⑤当日，朝早起きして，弁当を作る。

⑥学級で紹介し合い，学習カードに自分の感想や反省，友達へのコメントを書く。

また，子どもたちの弁当は，デジタルカメラで撮影され，学習カードに貼られていく。そのさい，チャーハンや焼きおにぎりなど子どもたちの流行メニューであっても，それぞれが微妙な個性をもっている点に教師は気づいている。また，季節感を大切にしている子ども，学校で習っていることも生かそうとしている子ども，オリジナルのレシピを開拓しようとしている子ども，朝あわてなくてもいいように前日の下ごしらえをしておいた子ども，時間を考えて調理の順序を工夫している子ども，朝寝ぼうしてもレトルト食品を活用している子どもなど，弁当づくりにある子どもたちの工夫や志向性を教師は発見しているのである。[29] 子どもの多様な可能性を教師が発見し，認める点は，次に示す竹下和男が子どもたちに贈った詩の一部＜表７＞にも表れている。[30]

＜表７＞

食事を作ることの大変さが分かり，家族をありがたく思った人は，優しい人です。
手順良くできた人は，給料をもらう仕事についたときにも，仕事の段取りのいい人です。
食材がそろわなかったり，調理を失敗したりしたときに献立の変更ができた人は，工夫できる人です。
友だちや家族の調理のようすを見て，技をひとつでも盗めた人は，自ら学ぶ人です。
かすかな味の違いに調味料や隠し味を見抜けた人は，自分の感性を磨ける人です。
旬の野菜や魚の，色彩・香り・触感・味わいを楽しめた人は，心豊かな人です。
一粒の米，一個の白菜，一本の大根の中にも「命」を感じた人は，思いやりのある人です。
スーパーの棚に並んだ食材の値段や賞味期限や原材料や産地を確認できた人は，賢い人です。
食材が弁当箱に納まるまでの道のりに，たくさんの働く人を思い描けた人は，想像力のある人です。
自分の弁当を「おいしい」と感じ「うれしい」と思った人は，幸せな人生が送れる人です。
シャケの切り身に，生きていた姿を想像して「ごめん」が言えた人は，情け深い人です。
登下校の道すがら，稲や野菜が育っていくのをうれしく感じた人は，慈しむ心のある人です。
「あるもので作る」「できたものを食べる」ことができた人は，たくましい人です。
「弁当の日」で仲間がふえた人，友だちを見直した人は，人と共に生きていける人です。
調理をしながら，トレイやパックのゴミの多さに驚いた人は，社会をよくしていける人です。
中国野菜の値段の安さを不思議に思った人は，世界をよくしていける人です。
自分が作った料理を喜んで食べる家族を見るのが好きな人は，人に好かれる人です。
家族が弁当作りを手伝ってくれそうになるのを断れた人は，独り立ちしていく力のある人です。
「いただきます」「ごちそうさま」が言えた人は，感謝の気持ちを忘れない人です。
家族がそろって食事をすることを楽しいと感じた人は，家族の愛に包まれた人です。

さらに，“弁当の日”には，教師も弁当をつくる。そのさい，教師は，「○○さんは，早起きできたかな」「○△さんは上手にたまご焼きができたかな」と考えている。“弁当の日”は，教師が子どもと新たに出会う日でもある。また，滝宮小学校では，滝宮地区婦人会の人たちが，毎回のように取材に来ている。子どもたちの弁当がひろげられるなか，婦人会の方々は，遠慮しながら，そっと近づいて「朝，何時に起きたの」「自分で作ったの」「これどうやったん」など子どもたちに聞いている。また，「おいしそう」「きれいにできているね」「うわあ，すごいアイデア」「カラフルにできている」など，思わず感嘆の声をもらしている。[31] 子どもの多様な可能性やドラマを発見できるしくみが，滝宮小学校や国分寺中学校の“弁当の日”にはある。子どもたちの弁当づくりのプロセスは，教師には見えない。弁当づくりのプロセスとドラマを子どもたちに聴くことが教師にできるのかどうか。弁当をつくるプロセスで子どもたちがもったエピソードを教師が聴くことに意味がある。ここで問われているのは，教師の応答力である。

３．“弁当の日”を支える家庭科カリキュラム

滝宮小学校の“弁当の日”は，５・６年生だけが行う。家庭科の授業が５・６年生にしかないからである。竹下和男は，「弁当づくりの基礎的な知識と基本的な技術を，学校が責任をもって教えます」という学校側のスタンスを保護者に説明している。[32]

滝宮小学校における５年生の家庭科実践は，次の通りである。１学期は，家庭科でコンロや調理に必要な用具類の使い方など，調理の基礎を学習した後，初めての調理実習を行う。ゆで野菜のサラダを作るのである。調理の基礎的な技能を学ぶとともに，その後の弁当づくりでは

旬の野菜をアレンジすることにつながってくる。夏休み前の学級活動では，おやつのとり方を学習した後，夏休みには，手作りおやつに挑戦し，自分で一工夫する調理の楽しさを体験する。２学期は，栄養士の先生とともに栄養の学習からスタートする。さらに，卵料理の実習をする。１学期に学習したゆで野菜のサラダに卵料理を加えると，栄養のバランスのとれた弁当ができることを確認するのである。また，フライパンの使い方も練習することが，弁当づくりにつながっているのである。

６年生の実践は，次の通りである。１学期は，家庭科で「１日のスタートは朝食で」をテーマに，朝食を食べることの重要性や朝食にふさわしい献立を学習する。さらに，学級活動で「健康と栄養」のバランスを考えた朝食をとることを意識させている。２学期の「楽しい食事の工夫」では，ジャガイモ料理や郷土料理などに取り組む。これと関連させて「弁当の日」のテーマが設定されている。子どもたちの弁当もフライパン料理中心から鍋を使った煮物料理へとレパートリーが広がるのである。また，学級活動では，「献立の工夫」について給食の献立表をもとに考え，旬の食材を用い栄養のバランスがとれた学校給食のすばらしさを改めて感じさせている。[33]

さらに，献立づくりのさい，グループごとにおすすめ弁当を提案させ討議させたり，たくさんの色を使うことやさまざまな調理器具を使うことを指示したりしている。滝宮小学校の“弁当の日”は，子どもたちの弁当づくりを支えるカリキュラム構成になっているのである。

Ⅲ．“弁当の日”の実践課題

竹下和男は，「あまり早起きしたくなかったから，前の日に作って朝は詰めてくるだけにした」という子どもに対して，嫌なことを早く済ませるために前日から用意する，前向きな行動を感じている。この子どもは，弁当をつくるために，何をつくるか献立を考え，前日までには食材を買って準備しておき，朝早く起きる，というプロセスを想像し，行動を選んでいる。朝早起きしたくないからどうするのかを自分で考え，前日に行動に移している点で，前向きな取り組みといえるのではないかという。“弁当づくり”のプロセスのなかで一見，否定的に見てしまいがちな子どもの行動に対して，なぜと問いただすのではなく，素直に子どもの声を聴いているのである。また，「こんな面倒なことをしなくても，お金を払えば楽に弁当は準備できる。弁当を作るのは，親の仕事であって，私は勉強やクラブ活動に打ち込めばいい。」という中学生に対して，このように弁当を準備する過程や家族の役割などを考え始めている点に，子どもの育ち始めをみている。

ここで求められる教師の指導力は，肯定を発見するちからである。同一の現象は，否定的にも肯定的にも評価できる。50点しかないと言うこともできるが，50点もとれたと言うこともできる。しかし，否定のなかに肯定をみるとは，否定と肯定を並べて見ることではない。[34] また，否定に目をつぶることでもない。否定は克服すべき課題であり，いま子どもたちに何が課題なのかを考え，その課題に取り組むことを要求することでもある。子どもの自立への励ましは，いいとこ見つけではない。ただ表面的にほめればいいのではなく，子どもが見えなくてはならない。“弁当の日”を支える教師の実践課題の一つめは，子どもの自立への励ましを行う指導力の構築である。

二つには，“弁当の日”から展開するカリキュラムづくりが求められる。竹下和男は，子ど

もは自分の弁当を作ったり，家族の食事を作ったりしているうちに，食品に対する興味関心が自然に高まり，様々な疑問が生まれてくると言う。例えば，「よくないという農薬をどうして使うのですか。農薬だってお金で買って使っているはずなのに，お金を使っていない無農薬野菜のほうがどうして高いのですか。」「よく食べているエビに抗生物質がなぜ入っているのですか。東南アジアから輸入するエビに，人間が使う薬と同じような抗生物質がなぜ入っているのですか。」といった子どもからの問いがある。[35] ポストハーベスト問題や食品の安全性の問題，ゴミ問題などといった，食を通して社会に向き合うことで生まれてくる疑問である。えさと食事はどう違うのか。塾の合間にお弁当で夕ご飯を食べている子どもたちは，食事をしているといえるのか。ホームレスの人たちが炊き出しで食べているのは，食事だろうか。ユニセフの援助を受けて食べているのは，食事だろうか。食事のことを考えると，いろいろな問題を考えることができる。[36] 食は，学ぶ内容が生活にかかわっており，学ぶ意味を実感できる。ふだんの生活では，わからないことが発見でき，社会の課題について考え，食べ物から世界が見えたり，自分の新たな一面に出会えたりするのである。[37] 子どもたちは，食を通して社会参加を求めている点に注意が必要である。滝宮小学校の家庭科カリキュラムは，子どもが弁当をつくれるようになるプロセスを支えるものとなっている。しかし，「家庭で実施する弁当づくり」を家庭科で学ぶのだと，家庭科と“弁当の日”の関係をとらえると，献立や調理方法の工夫に直接役立つ狭い学習に限定されてしまう。弁当をつくるためのカリキュラムだけでなく，“弁当の日”を通して子どもたちが気づいていく問いに応えられるカリキュラムづくりが求められている。滝宮小学校や国分寺中学校は，地域とのつながりが深い学校である。例えば，運動会後の懇親会として，ＰＴＡ役員と小学校職員の「どじょうの会」がある。子どもが，地域の八百屋で野菜の調べ学習を行うこともあるという。学校と地域が連携して子どもを育てていく基盤が整っているように思われる。献立や調理に限定されない食というテーマは，多様で多角的な学校と地域のつながりを構築する可能性を示している。

三つには，弁当の日に，弁当をもってこない子どもへの対応である。「昨年度も３年生担任で“弁当の日”を３度経験した。そのうち２回，生徒が弁当を忘れてきていたので，多めに弁当を作ろうと考えていた。」[38] と記述されているように，“弁当の日”に弁当をもってこない子どもがいる。子どもたちがもってくるのを忘れたり，つくってくるのを忘れたりしたということもあるだろう。ただ，そのなかに「昨年は経済的に困っていて，おかず代が用意できないという生徒に，食材を担任が用意して持っていったこともありました。」[39] というように，家庭の経済的な問題も表れる。ここでは，子どもの生活状況の悪化を，保護者の努力不足としてみていない点は評価できる。しかし，この問題は，子どもが困っているだけではなく，子どもも親も困っているととらえる必要があるのではないだろうか。教師には，おかず代が用意できない家庭の子どもが，土日には何を食べているのか，夏休みや冬休みはどうしているのか，というような想像力が求められている。また，ヘルプを出せないでいる保護者がいるという点を認識する必要がある。“弁当の日”の実践には，父子家庭の父親が，担任に説得され，弁当をつくるようになるというエピソードがある。[40] つくらないのではなく，つくれない状況にある保護者のヘルプに，教師が気づいて応答している事例である。“弁当の日”の実践には，教師が保護者も子どももヘルプを求めている存在ととらえ，両者の関係を支えていくしくみが必要となる。

Ⅳ．おわりに

子どもたちは，“弁当の日”を通して，他者感覚が育まれていく。“弁当の日”を通して育まれる子どもの自立には，他者とのつながりへの気づきがある。“弁当の日”には，保護者が子どもの弁当づくりを見守るなかで，子どもに試行錯誤や失敗をする時間を与えているかどうか，保護者と子どもの関係に注意が必要である。しかし，“弁当の日”は，学校が保護者に責任や役割を押しつけるものではない。保護者との協働のなかで，構想されている点が重要である。

“弁当の日”は，年に１回きりのイベントではない。子どもの自立を促すくりかえしの機会が必要である。また，教師は，子どもがつくってくる弁当に，多様な可能性を発見し，弁当づくりのプロセスとドラマを子どもたちから聴く応答力が求められる。とりわけ，否定のなかに肯定を発見し，子どもの自立への励ましを行う指導性が求められている。

さらに，“弁当の日”を通して，子どもたちが気づいてきた問いに応えていくカリキュラムが求められる。社会科や総合的な学習の時間とのつながりも構想されていなければならない。子どもたちは，つくって食べるのが好きだから，“弁当の日”に取り組んでいるのではない。学ぶ内容が生活にかかわっており，学ぶ意味を実感できるからでもある。子どもの学びの志向性に注意が必要である。調理や献立づくりに限定されないカリキュラム構成が求められるのである。

また，“弁当の日”は子どもたちの家庭の状況が見えるしくみでもある。弁当をつくれない子どもたちの背景にある社会的な状況に切り込むためには，学校が孤立していては始まらない。保護者と子どもの両者の関係を支えていくしくみの構築が求められる。

今後は，学校教育における“弁当の日”を中心とした食育実践の構想を検討するとともに，大学における“弁当の日”の実践の特質を明らかにしていきたい。なぜなら，“弁当の日”は，弁当づくりを通して社会と向き合い，人との関係を育んでいくことを教師にも求めていると思われるからである。

註

1）平成18年度までの“弁当の日”実践校の広がりは次の通りである。平成13年度末から平成15年度末までは，1校ずつの増加であったが，平成16年度末に4校，平成17年度末には14校，平成18年度末には50校に達している。「食 くらし」取材班『食卓の向こう側⑨』西日本新聞社，2007年，80頁，参照。

2）竹下和男『「弁当の日」がやってきた ― 子ども・親・地域が育つ香川・滝宮小の「食育」実践記』自然通信社，2003年，2-3頁，参照。

3）同上書，25-26頁，参照。

4）竹下和男『台所に立つ子どもたち ―“弁当の日”からはじまる「くらしの時間」香川・国分寺中学校の食育』自然通信社，2006年，64頁，参照。希望したクラスのみで実施したのは，年度途中に実施方法を検討した際，全生徒が関心を示すのかという点が懸念されたからである。二年目からは，全校行事にふみきっている。西日本新聞社「食 くらし」取材班『食卓の向こう側⑧』2006年，47頁，参照。

5）竹下和男，2006年，前掲書，34-35頁，参照。なお，最初から子どもたちがすべてつくるわけではない。冷凍食品を利用してもよいとされている。

7）西日本新聞社「食 くらし」取材班，2006年，81頁，参照。たまご焼きを焼くときに油を入れすぎて

どろどろになったり，しょうが焼きでしょうががフライパンからとんでしまうこともある。竹下和男，2003年，前掲書，121頁，参照。

8）竹下和男，2003年，前掲書，78－79頁，参照。また，母親が手伝い続けて，そのうちに子どもが自分でつくろうとしなくなり，「“弁当の日”は意味がない」と感想をもらした母親がいたことも報告されている。子どもが弁当づくりに意欲を示さなくなったとき，保護者の過干渉が背景にある点が指摘されているのである。なお，目玉焼きを何度もつくる子どもを見守りながら，子どもが失敗する権利を尊重し，自分でつくることや一品ずつでもつくるおかずが増えたりすることの大切さに気づいている例も，報告されている。佐藤剛史『すごい弁当力！子どもが変わる，家族が変わる，社会が変わる』五月書房，2009年，102-103頁。

9）竹下和男，2006年，前掲書，36頁，参照。「待つ」，「見守る」，「任せる」大きさを“弁当の日”は，保護者に教えている。西日本新聞社「食 くらし」取材班，2006年，前掲書，46頁，参照。

10）竹下和男，2003年，前掲書，83-84頁。ひじきご飯をつくった子どもは，高校3年間の弁当を一人でつくり続けている。また，母親にとっても，料理を学び直す機会になっている。佐藤剛史『もっと弁当力!!作って伸びる子どもたち』五月書房，2010年，130-132頁，参照。

11）竹下和男・渡邊美穂『泣きみそ校長と弁当の日』西日本新聞社，2010年，109-110頁，参照。料理をつくっている親の存在のありがたさに気づくものに，「ピーマンくさい」というエピソードもある。

12）竹下和男，2006年，前掲書，37頁，及び，西日本新聞社「食 くらし」取材班『食卓の向こう側①』2004年，6頁，参照。

13）竹下和男・渡邊美穂，前掲書，13-30頁，参照。くろこげの焼肉弁当は，独立宣言弁当と名付けられている。

14）四つのコースを作って，小学校三年生を相手に，「“弁当の日”をするよ」と提案した実践がある。四つのコースには，全部ひとりで作る完璧コース，一品だけ作るコース，盛りつけだけするコース，全部作ってもらってありがとうというだけのコースである。完璧コースを選んだ子どもが持ってきた弁当に，ご飯の中にキュウリ一本と味噌だけというのがあった。ほとんどの子どもたちは，栄養価や彩りや盛りつけの完成度の高いいくつものおかずの入った弁当をイメージしているが，自分一人でできる自立度に価値がある。鎌田 實・竹下和男『始めませんか 子どもがつくる「弁当の日」』自然食品通信社，2009年，121頁，参照。なお，この実践は，課題を子どもたちと相談しながら，野菜の多く入った弁当や，親がつくったおかずが一品入っている弁当に変化しながら，全校に“弁当の日”が発展している。佐藤剛史，2010年，前掲書，81-100頁，参照。この「イナマス方式」については，次の文献も参照した。稲益義宏「子どもをその気にさせたコース別の『イナマス方式』」『月刊JA』Vol. 656，2009年10月号，38-41頁，稲益義宏「『弁当の日』は柔軟に無理なく取り組もう！ ― 稲益流コース別『弁当の日』」『食農教育』No.56，農文協，2007年７月号，96-99頁。

15）竹下和男，2006年，前掲書，53-54頁，参照。

16）竹下和男，2006年，前掲書，137頁，参照。料理には15分しか時間を費やさないのに，朝の自分の化粧には1時間かけるというように，子どもは，親にとって自分がどれだけ大切かを，何かと比べながら，時間の費やされ方を見ているとも指摘されている。佐藤剛史，2010年，前掲書，31頁，参照。

17）同上書，166-167頁。

18）保護者との協働に関連して，竹下和男は，次のように指摘している。「私がよくするたとえ話で，一枚の紙が学校教育の守備範囲であり責任，もう一枚の紙が家庭教育の守備範囲や責任。二枚の紙を横に並べて隙間を無くするのではなく，学校教育と家庭教育の重なり部分（のりしろ）を作りませんかと言っている。」鎌田實・竹下和男『始めませんか 子どもがつくる「弁当の日」』自然通信社，2009年，44頁。

19）竹下和男，2003年，前掲書，165頁，参照。

20）同上書，42頁。

21) 同上書，58頁。
22) 作花志保「実践報告１ 弁当箱に“知恵と工夫”を詰める「弁当の日」を設定」『総合教育技術』教育技術連盟，2004年７月号，74-77頁。
23) 竹下和男，2003年，前掲書，76頁，参照。
24) 竹下和男「『子どもだけで作る“弁当の日”』― 親は手伝わないで！で深まる家族の時間」『日本調理学会』誌，日本調理学会Vol.41，No.2，2008，154-157頁，参照。また，九州大学で行われている“弁当の日”のテーマは，バラエティに富んでいる。「名前の頭文字弁当」「手で食べられる弁当」「一つの野菜で和・洋弁当」「百円弁当」「でかっ！弁当」「あつっ！弁当」「十人十色弁当」などがある。なお，大学で行う“弁当の日”の実践については，あらためて別稿で検討したい。
25) 西日本新聞社「食 くらし」取材班，2006年，前掲書，48頁，参照。
26) 竹下和男，2006年，前掲書，41頁，参照。また，「弁当の日」を単発的な行事にするのではなく，平素の労働（家事）にまで習慣化させたかったからである，とも指摘している。竹下和男「“弁当の日”っておもしろい子どもの育つ環境を変える！香川県滝宮小学校の食育プログラム」『保健師ジャーナル』Vol.60，No.7，2004年７月号，医学書院，652頁，参照。なお，４年目を迎えた2004年度は，年７回であり，５年生の10月・12月と６年生の５月が年間計画にはない。瀬戸享子「子どもが作る“弁当の日”― 弁当箱に“知恵と工夫”を詰めて ―」『畜産コンサルタント』中央畜産会，37頁，参照。
27) 佐藤剛史，2009年，前掲書，62-63頁，参照。なお，中学生の多忙化に対応して，国分寺中学校では，“弁当の日”の実施をすべて月曜日にしている。日曜日の夕方が，1週間のなかで比較的に時間を取りやすいからである。また，遠足や校外学習など，給食がない日に実施すれば，給食を止める必要はない。「朝のくそ忙しい時間帯に，子どもが台所を占領するなんて迷惑です」という保護者からの強烈な反対に対して，「弁当の日は，登校時間を一時間遅らせます」と対応した事例もある。
28) 竹下和男，2003年，前掲書，48-49頁，参照。
29)「この学校の先生たちは，こちらの気持ちを分かった上で指導している。言葉が通じる大人たちだ」という信頼があるという。竹下和男・渡邊美穂，前掲書，3頁，参照。
30) 同上書，158-160頁。なお，この観点がいくつあるかという評定用に使うものではないと指摘されている。鎌田實・竹下和男，前掲書，28頁，参照。
31) 竹下和男，2003年，前掲書，89頁，参照。
32) 竹下和男，2006年，前掲書，37・38頁，参照。
33) 瀬戸享子，前掲書，2005年２月号，36-39頁，参照。
34) たとえば，「この子は算数はできないけど，国語ならできる」とか「あの子は教科の成績はよくないが，行事や係活動はがんばっている」とか，一人の子どもの良い部分と悪い部分を並列視するのではない。「困った子」にあるヴァイタリティー，「すぐ泣く子」のなかにあるやさしさ，「忘れ物の多い子」のなかにある集中力。問題を起こさない子には消極性が隠れているし，「はじめてかみつく」ことには最大の抵抗があり，髪をひっぱることには仲間への交わり要求がある。いつも遅刻している子どものしまったという表情を教師は見つけることができ，発言の言葉に詰まって黙って座る子どもにあるわかりたいという要求を見いだすこともできる。ひとの悪口を言うのは，それだけ他から関心を持ってもらいたいと思っている証拠であり，やめさせることのできない学級の弱さがある。吉本均編著『否定のなかに肯定をみる』明治図書，1989年，参照。また，教師が人間の評価の多様性を忘れているという指摘もある。鎌田實・竹下和男，前掲書，74頁，参照。
35) 竹下和男，2003年，前掲書，154-155頁，参照。
36) 今関和子「食事ってなんだ？」全国生活指導研究協議会編『生活指導』NO.671，明治図書，2009年，10月号，50-53頁，参照。
37) 山田綾「『食』の世界をリアルに総合的に見つめる」山田綾・鶴田敦子編著『生活を見つめる食』

日本標準，2010年，8頁，参照。

38）竹下和男，2006年，前掲書，107頁。

39）同上書，29頁。

40）竹下和男・渡邊美穂，前掲書，48-64頁。家の冷蔵庫には食材がなく，いつもお父さんが買った弁当か外食ですませている家庭から，「父子家庭の子どもが辛い思いをするような“弁当の日”はやめてほしい」という連絡があった。その父親の話に対して，「でもね，お父さん。離婚するのかしないのか，お母さんととことん話し合って離婚した方がいいと決めたんでしょう？」「どちらが子どもを引き取った方がいいかとことん話し合ってお父さんが育てると決めたんでしょう？」「だったら，『おれが引き取ったからこの子はかわいそう』ではなくて，『おれが引き取ったからには息子が一人前になるまでおれがちゃんと育てる』という行動に出てもらえませんか」と教師は子どもの立場から迫っている。